

外科手術を受けるべきか、受けるべきでないか---

この決断は、私たちには難問です！

デビー ハーデイ (カリフォルニア州ウイティア)

□ To have surgery or not to have surgery ---That is the question. Written by Debbie Hardy, Whittier, California, dhardy [828@earthlink.net](mailto:828@earthlink.net)

□□ Reprinted from POST-POLIO HEALTH Vol 24, No1, Winter 2008. pp1-4, with permission of Post-Polio Health International ([www.post-polio.org](http://www.post-polio.org)). Any further reproduction must have permission from copyright holder.

外科手術を受けなければならないことを誰かに話してみなさい。そうすればあなたの会話が聞こえる範囲にいるまわりの人たちは思うままに、あなたが受けようとしているのと同じ手術を受けた親戚、友人、知人がどんなひどい目にあっただかを話し始めることでしょう。

外科手術を受けるか否かは誰にとっても難しい決断です。とりわけ私たちのように慢性の健康問題をかかえているものにとっては大きな決断です。手術にまつわる一般的な心配に加えて、今の状態が悪化し結局痛みがひどくなるのではないかという恐怖、或いは今以上に行動が制限されるのではないかという不安が加わってきます。もうひとつの大きな懸念は回復に要する期間です。回復に、かなり長い時間がかかるのではないか、日々どれほどの痛みをどのくらいの期間耐えなければならないのか、といった懸念です。

2005年3月、私は整形外科医からMRIを受けるようにといわれました。腰のあたりから右脚、そして足の方に伝わる痛みを感じていたからです。MRIで中等度の脊柱管狭窄があることがわかりました。脊柱管狭窄というのはいくつかの脊椎管が狭くなっているという意味で、骨或いは周りの軟部組織が増生するため、もしくは両方の増生により骨の開口部（下肢に行く神経の束がここを通る）が狭くなってしまいます。神経と脊髄（或いはそのどちらか）が圧迫されることにより、下肢のしびれ、痛みや運動障害が起こるというわけです。

かかりつけの内科医からは、この状態だと、いつかは外科手術を受けなければならないだろう、そのことも考えておくように、というアドバイスを受けました。脳裏には腰の手術を受けた人たちがひどい目にあっただという恐ろしい話がよみがえってきました。外科手術を受けるとしても、それは何度も何度も拒否した挙句のことであろう。或いはまったく歩

けなくなった時のことだろうと思っていました。

その後2年間、身体的に無理をしすぎた時に、私はしばしば薬の助けを求めました。痛みがひどいとき、耐えられないこともありました。数日間、外科手術のことが頭をよぎることもありました。しかし、結局ステロイドや鎮痛剤、休息をとることで痛みは緩和できたのです。そして日々の忙しさを外科手術のことは頭から離れていました。

6月に転倒し、その打撲傷は回復に向かっていたのですが、右脚が膝から下にかけて動かせないのに気づきました。これは私にとってはとりわけ辛いことでした。ポリオによって左脚が麻痺しているため私は長下肢装具を着け松葉杖をついて移動しているのです。しかし、右脚は常にかかなりの強さを維持していました。ですから右脚が使えなくなれば自分の足で適切な動きができなくなってしまうのです。

私が最初に思ったのは転倒によって大腿四頭筋を痛めたのだろうということでした。内科医の診断を受けたところ、大腿四頭筋に問題はなく、腰椎の変形や脊柱管狭窄が右脚の痛みと運動障害を引き起こしているのではないかとということでした。そして腰のMRIを受けるよう、また神経内科医の診断を受け神経に問題がないか調べてもらうようにとの指示も受けました。

神経内科医による神経伝導検査でわかったことは、膝から上の右大腿部の神経の損傷が見られるということでした。しかしこの損傷は古いもので、おそらくポリオ罹患時のものだという事です。脚を使いすぎてきたことに転倒による傷が加わり、損傷を受けていた神経を一層悪くしたのだろうとのことでした。神経を少しでも癒すことができれば問題の脚も再び使うことができるだろうということでした。

残念なことにMRIで脊柱管狭窄が中等度から重度へと悪化していることがわかりました。脊髄の第4腰椎から第5腰椎レベルを完全に圧迫しているようです。このまま放っておくと近い将来、膀胱や腸の機能にも支障がでてくる（尿失禁や便失禁）可能性があるとのことでした。これを聞いて決心がつけました。

痛みがあり歩行が困難という問題もあるのですが、腸や膀胱の動きをコントロールできなくなるとすれば計り知れない不安が伴います。そこで外科手術を受けることにしました。

整形外科医から外科手術の手順について十分な説明を受け、この手術は脚の痛みをとることはできても、他の要因もかかっているため腰痛は完全にとることはできない、ということを知ったあと、セカンドオピニオンを求めるようにとのアドバイスも頂きました。またインターネットで私の状態に関する事柄や手術についてよく調べ、手術を受けるという

決断に迷いがなくなるまで、とことん質問をしてはどうかと提案してくださいました。

2007年9月、私は腰椎椎弓切除術を受けました。腰部を切開し、脊髄と神経を圧迫している脊柱の骨と軟部組織を除去し、その部分を広げる手術です。

手術は思ったよりも時間がかかり、症状が重度になるまで手術を先延ばししていたため特に困難な手術となったわけですが、術後目覚めて最初に気づいたことは、これまで腰部から足にかけて感じていた痛みが消えたということでした。又、思ったよりも手術による痛みはひどくなかったとも感じました。術後2日で退院し自宅に戻り、一週間後には料理と簡単な家事ができました。

担当の整形外科医であるカリフォルニア州プラセンチア (Placentia) のDr.

ジョセフGメイヨー (Joseph G Mayo III) に、私の体験を記事にしようと思うと伝えたところ、医師は喜んでくれました。腰部の手術に関しては一般に、まだ否定的なイメージがあるが、私の体験を記事にすることでこの手術の良い点を他の人たちにもわかってもらえるというのです。

手術を検討している人たちに何かアドバイスはないか医師に聞いたところ以下のようなコメントをいただきました。

- ◆ 正確な診断を受けることが大事である。
- ◆ 適切な治療を受け、手術をせずに薬で治せるかどうかを診てもらうこと。
- ◆ 自分の状況と治療計画を納得いくまで理解すること。納得するまで質問をすればよい。
- ◆ 医師と患者はチームとして協力していくこと。両者の努力によって協力体制は成り立つものである。

患者として、最も重要なことは良い外科医を探すというだけでなく、患者の尊厳を保ち患者の意見を尊重してくれる医師、信頼でき意思疎通ができる医師を探すことです。私はそういう医師を探すことができました。そのことが結果に大きな違いを生じさせたのだと思います。手術を受ける決断をして良かったと思うか？もちろんです！ポストポリオの症状があり、からだの動きにも制限がありますが、このような術前の症状がない人と比べても私の術後の回復に特に問題はなかったと思います。むしろ今回の手術は今までで一番痛みの少なかった手術であり、回復も最も速かったといえます。

ただ手術をするという決断をくだすまで、不必要な心配をし、長く先延ばしにしていたことは悔やまれます。腰部の手術は医学分野の他の手術と同様、常に進歩しているのだとい

うことをもう少し早く気づいていればよかったなと思います。

Translation by  
Japanese Network of Polio Survivors  
Masakuni Mukoyama, MD  
3 Kuromoncho, Higashiku  
Nagoya, Japan 461-0035